



ツバル(解説：表紙裏)©shuichi endou / Tuvalu Overview

中学校 社会科のしおり

2010年度
1学期

4

月号

社会科の先生方
ご閲覧ください



帝国書院



①



②



③



④

写真で見る社会科

地球温暖化とツバルのいま

南太平洋、フィジー諸島共和国の北、赤道直下に島国ツバルがある。2000年ほど前にサモア周辺から移動したポリネシア民族の末裔、1万人が暮らす。9つの島からなるツバルの面積は26km²（東京都の新島に等しい）、平均海拔は2m程度で、海面上昇に対して脆弱な島国といわれる。首都のフナフティ環礁には国際空港がありフィジーから日本へ週2便の飛行機が就航している。飛行場のない他の離島には小型の貨客船が月に2回ほど人と荷物を運ぶ。不便な離島には伝統的な自給自足の暮らしが色濃く残っている。しかし、首都フナフティ環礁では、外国からの商品経済の流入が著しく、海面上昇の影響もさることながら、グローバリズムがもたらす問題が顕在化している。

50数年ほど前から始まった気候変動によって、ツバル近海では台風の発生場所が変わり、ツバル北方で発生した台風によって被害に遭うようになった。同時に、地球温暖化により海水表層が暖められ海水の熱膨張が原因となる海面上昇も進行している。とくに雨期の12～3月にかけての大潮の際は、低気圧による強風と異常潮位が重なって海岸侵食が著しくなる。同じ時期、フナフティ環礁では島の中の低地に海水が湧き出す洪水被害も悪化の

一途をたどっている。湧き出した海水は伝統農業であるタロイモ畑やバナナ畑などに流れ込み、塩害が発生する。

塩害による作物の不作と商品経済の流入は、首都の島において廃棄物の問題を引き起こした。今までは自然に還るゴミしか出さなかったツバルの伝統的な生活は変わりつつあり、プラスチックやビニールなどのゴミが増え、島の北端に大きなゴミ捨て場ができてしまった（写真④）。海岸侵食によって被害も深刻化してきており、フナフティ環礁のファレフェケ島では、島の1/4ほどを侵食によって失ってしまった（写真②）。島に土地を持つ地主たちの境界線を巡る裁判も増えてきている。

侵食被害の対応策として首都の島からボートで1時間ほどにあるフナファーラ村ではマングローブの植林活動が進められている（写真①）。堆積作用が進む砂地にマングローブを植えることによって、その根元で砂を固定化し新しい土地を造り出すことを目的に進められている。協力している島民は、将来マングローブの根に集まる漁業資源にも期待している。同村では、いまだにツバルの伝統的な自給自足の暮らしが営まれている（写真③）。島が存在し、周辺に豊かな自然が残っていることが彼らの生存の必須条件である。（Tuvalu Overview 遠藤秀一）

写・真・募・集

このコーナーの「カラー写真」を募集しています。国内・海外で撮影された社会科の写真を、資料編集部「中学校社会科のしおり」係までお送りください。